みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

A Historical Study on the Developmental Process of Ecotourism in Iriomote Island

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 海津, ゆりえ, 真板, 昭夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00002093

西表島におけるエコツーリズムの発展過程の史的考察

海津 ゆりえ
(資源デザイン研究所)

真板 昭夫
(京都嵯峨芸術大学芸術学部)

A Historical Study on the Developmental Process of Ecotourism in Iriomote Island

Yurie Kaizu
(Earthwork)

Akio Maita
(Kyoto Saga University of Arts)

我が国で最初のエコツーリズム協会を発足させた西表島地域住民の，資源価値に対する認識過程をたどりながら，1996 年の協会発足に至るまでの，地域社会にエコツーリズムが受け入れられていった要因および地域社会に及ぼした諸効果の分析を行ったものである。本研究において，第一段階の要因である「島外の権威者による点的な資源の価値付け」から第七段階の要因である「利益の地域還元と組織活動から地域活動へ」に至る 7 つの発展要因が確認され，また効果としては，「観光客の年間を通じての増加」をはじめとした 5 つの効果が確認された。一方，今後の課題としてとしては，「業者の急増による利用エリアの重複」，「観光客の増加に適応したインフラの未整備」，「エコツーリズム協会と地域との軋轢と解消」などが抽出された。

This study is a analysis of the various effects that exerted on some factors of ecotourism development and the community until the establishment of the first ecotourism society in Japan (1996), with analyzing a process of Iriomote islanders' recognition toward the value of resources. From this process, seven development factors were confirmed. The first initial stage is "The partial giving the value of resources by the authority outside the island", and the seventh stage is " To the social activities from the return of the profit and the organization activities". And five effects are confirmed, for example, "the increase of tourist through the year". On the other hand, the following future problems

are extracted; "The duplication of the use of area due to a rapid increase of dealers", "Infrastructure not adapted to the increase of tourist", "Friction between the member of society and the other islanders and its solution".

1. 西表島の概要
2. エコツーリズム協会設立の背景
2.1 復帰からエコツーリズム協会設立までの経緯
2.2 西表島エコツーリズム協会の構成メンバー
3. エコツーリズム開発のための資源調査
3.1 ヒアリング準備作業
3.2 ヒアリング調査
3.3 島民を通じた調査
3.4 その他の調査
4. エコツーリズム協会の活動
4.1 会員・島民に対する普及啓発活動
4.2 自然環境と伝統文化の保全と継承
4.3 各種情報の収集と発信
4.4 部会活動
5. エコツーリズムの効果と新たな課題への対応
5.1 効果
5.2 課題
6. エコツーリズムの発展要因
7. 結論

Key words: Okinawa prefecture, Iriomote island, sightseeing, ecotourism, resource research, Iriomote wildcat
キーワード：沖縄県, 西表島, 観光, エコツーリズム, 資源調査, イリオモテヤマネコ

1. 西表島の概要

西表島は, 沖縄県八重山郡竹富町に属する。面積 284km^2, 周囲約 130km, 最高標高 470m の亜熱帯の島である。人口 2000 人強の島で, 約半分の面積は国立公園地域に指定されている。隣の石垣島から船で入る以外の交通手段がない。

西表島では本土復帰前後から, その豊かな自然的・人文的資源に対して多様な資源把握の試みがなされてきており, エコツーリズムに取り組み始める 1990 年頃には, 自然を目玉とした石垣島発着のマス型ツアーが盛んに行われていた。1996 年に全国初のエコツーリズム協会が発足してからは, エコツーリズムの普及とエコツアーの推進のメッカとして日本中から注目されている。

筆者らは西表島エコツーリズム協会の設立前後から島おこしに関わってきており知見を有していることから, 日本におけるエコツーリズム開発の先進事例としての西表島をとりあげ, その開発プロセスと現在の取り組みと課題について述べることとした。

2. エコツーリズム協会設立の背景

2.1. 復帰からエコツーリズム協会設立までの経緯

西表島では，1996 年 5 月に全国初の「エコツーズム協会」が発足した。島人が中心となってこの協会が発足するまでには 20 年以上の歳月を費した。この歴史は，沖縄県の本土復帰をきっかけに始まっており，地域をとりまく社会情勢の転換がエコツーリズムへの着目の契機となった好例といえる。

島の自然と人の共存の方向性を探る中から生まれてきたエコツーリズムへの歩みは，6 期に分類できる。

(1) 農地開発期（1950 年代～1975 年頃）

本土復帰前の 1950 年代には，西表島における初めての公的調査として琉球政府主導により文化財・史跡・記念物指定のための調査が行われ，サキシマスオウなどが指定されるにいたっている。これに続き，1960 年代には自然公園指定のための学術調査（生物調査）などが実施され，代表的なものとしてスタンフォードレポート（1960）などがあげられる。西表島の自然と文化に公的関心が向けられ始まった時期である。

だが 1972 年の本土復帰直後は「本土並」に追いつくために国が財政を投入し，パイナップルなどの農地開発や道路建設が次々と行われた。一方で，いまだ手つかずで残されている自然の豊富さを守るため，国は復帰直後に西表島の中央の山部と海岸の一部を国立公園に指定した。

(2) 観光開発期（1972～1978 年頃）

本土から見ると沖縄県は，珍しい亜熱帯の島の国である。隆起珊瑚礁の島々もさることながら，特に西表島には日本一のマングローブ林やその景観を一望できる浦内川などが観光の目玉となった。だが当時の西表島は観光開発が進んでおらず，民宿や小さな旅館しかなかったため，「カニ族」と呼ばれるキャンパーが中心であった。

やがて北岸道路が開通し(1975)，観光バスが走るようになると（1978），飛行場を持っている隣の石垣島発で，大型バスで観光客を急ぎ足で島内一周させる日帰り型のマス・ツーリズムが行われるようになった。当時，石垣島と西表島は船で 1 時間 15 分程度の距離であったため，ワンポイント観光が可能だったのである。また外部資本による土地の買い占めが始まったのもこの頃であった。

(3) 開発か保護か，という対立期（1975 年～1983 年頃）

1965 年，その後天然記念物に指定され，近年日本版レッド・データ・ブック 5)にも掲載された「イリオモテヤマネコ（*Felis Iriomotensis*）」が発見された。公害問題などが人々の環境保護意識を高めていた当時の風潮も追い風となって種の保護を訴える声が高まり，1975 年には

ドイツ人動物学者ライハウゼン氏が書簡によって“ヤマネコを守るためには島民は移住すべきだ”という考えを提唱した。これをきっかけに自然保護か観光開発か，という論争が起きた。また，ライハウゼンに代表されるように研究者は地元住民のことを考えていない，研究者に協力しても仇で返されるだけだとの認識によって，西表島を研究フィールドとする研究者が島を追われるという事件も起きた。

保護派の人たちは，自然を保護するために一切の開発に反対し，一方開発派の島民は，開発無くして生活が成り立たないと主張し，「ヤマネコか，人間か」との議論で島が真っ二つに分かれて対立した。このときの保護派は，本土から西表島に移り住んできた人達で，生活圏を東京におく人々や，研究者が中心だった。

(4) 調査期（1983 年～1994 年）

こうしたなか，島民の一部で，消えつつある島の文化や伝統を復活させ，島民の手による地域づくりを模索する「工芸村運動」が始まった。

またこの頃，農地開発の先鋒だったパイナップルや砂糖きび等の基幹農業が暴落し，農地開発を続けても意味がないということが次第に明らかになり始めた。これを代替する産業が必要だとの意識から，農家側が観光産業のあり方について検討を始めた。ところが実際に行われている観光は，隣島の石垣島からの日帰りが中心で，地元への経済効果は少なく，また素通り観光が中心で，野生動物などの資源が有効に活かされていない実態に気づく。

一方で，九州大学や琉球大学の研究者達は，イリオモテヤマネコのテレメトリー調査（1982～1985 年）を始めた。当初は山の奥深くにいると思われていたイリオモテヤマネコであったが，調査の結果，もっぱら山と平地の境界部に棲み，蛙や蛇が多い畑と集落の周辺に出てきて農地の生物を食べて生活していることが明らかになった。保護を優先するあまり農業をやめてしまえば，同時にヤマネコの餌もなくなり，保護につながらないことがわかったのである。島民の協力を得なければ保護ができない—1983 年にこの調査結果を踏まえた住民説明会が実施され，「保護か観光開発か」といったこれまでの対立から「ヤマネコも人間も共存すべきだ」という，保護と開発の両立の方向へと島全体のコンセンサスが少しずつ変化し，人と自然の調和ある発展のあり方の模索が始まった。

こうした経緯を踏まえ，島民は「持続可能な観光開発」の実現を志すようになった。折しも環境庁が，国立公園での新しいソフトとしてエコツーリズムに着目していた時期と重なり，1991 年に環境庁はモデル地域として西表島を選定し，島民との協力による資源調査を開始した。この調査は農民，研究者，観光業者，学校教師など，延べ 200 人の島民の協力を得て行われた。この調査の手法及びとりまとめ方法については，次節で述べる。

(5) エコツーリズム勉強会開始（1994 年～1996 年）

資源調査の結果は，各種のアウトプットにまとめられ，得られた情報の共有化を図るため

に1994年5月『西表島エコツーリズムガイドブック』が発行された。出版記念パーティの場において，この本をきっかけに西表島の観光の方向性をエコツーリズムとしようではないか，との発案があり，本土から来て地元で観光業を営んでいる人や研究者などに加えて行政なども巻き込んで，エコツーリズム協会を設立するべく準備会が結成され，島民が中心となった勉強会が開始された。

なお2000年5月現在，ガイドブックは発行部数1万部を超えた。1冊2500円で販売され，8割が協会の収益として活動資金に組み入れられている。

(6) エコツーリズム協会設立（1996年）

以後，竹富町観光協会の幹部も務めている島民がコアとなって，勉強会の継続と協会の設立方法についての議論が始まったが，設立に向けていくつかの課題が存在した。そのうちの一つは西表島エコツーリズム協会と竹富町観光協会のスタンスの取り方である。竹富町は有人島9島を抱えており，西表島はその中の一つに過ぎない。観光協会の傘下で活動をするなら町からの援助が期待できるが，代わりに活動基盤を竹富町の島全体に広げなければならない。結論として，まず西表島を基盤にエコツーリズム協会を作り，成功させてから，竹富町全体に波及させるという考え方に徐々に集約された。設立総会一週間前に，協会の幹部候補者らが趣意書（図2 参照）をもって竹富町長および観光協会を訪れ，協力を依頼した。

勉強会としては環境庁のモデルツアーや自主研修ツアーなどを行い，講演会などを開催し，エコツーリズムについての知識を蓄積していった。準備会発足から2年後の1996年5月14日，満を持して「西表島エコツーリズム協会」が正式に設立された。

2.2 西表島エコツーリズム協会の構成メンバー

西表島エコツーリズム協会は設立当初から会員制度を設け，島在住者のみが正会員になる資格を有している。上に述べた歴史的な経緯において島おこしや資源の保護と利用に関わってきた，多様な人々の参加を得て構成されている。

(1) 会員として協会に関わる人々

①島内在住観光関連業者

島内在住ガイド，民宿，旅館，みやげ物屋など直接観光業に関わる立場の人々で，協会のメンバーの大半を占める。ここには島出身者や島外からの移住者が含まれる。

②島おこしグループ

工芸村運動や農業等を通じて島おこしに関わってきた島民たち。直接観光業に携わっていなくても，島の資源の見方や関わり方を良く知り，外から訪れる人たちにどのようなメッセージを島として発信し，どのような環境教育を提供すべきかをアドバイスできる立場にある人々である。

③交通機関

石垣島から船で入る以外の入島方法がない西表島にとって，船は観光客が必ず利用する交通機関である。また島内でも路線バスは本数が少ないためレンタカーかタクシーが観光客の足となる。交通機関は観光客にとって島の印象を左右する要素の一つである。

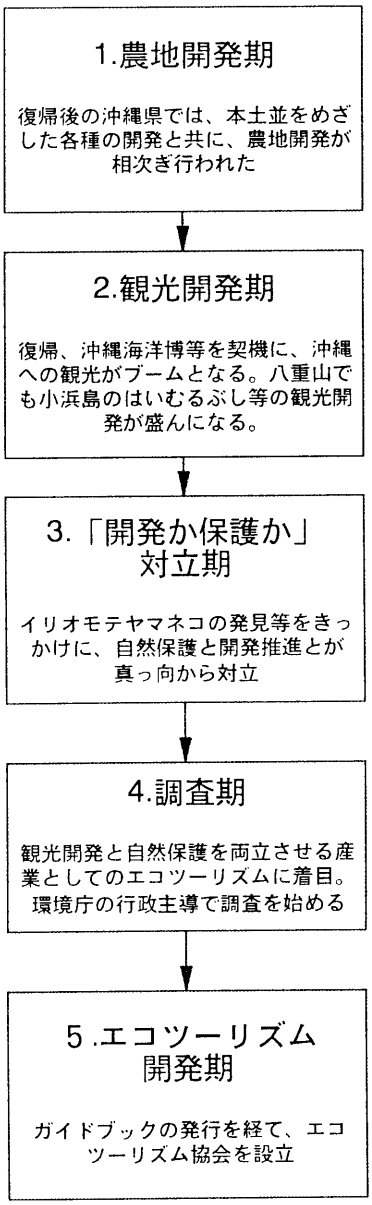


図1 西表島におけるエコツーリズム実践までの道のり

趣　意　書

西表島は、ヤマネコの棲む秘境の島として、日本全国に知られています。そして、四季折々のすばらしい自然や文化が数多くあります。それらは、まだ人に知られることなく眠っています。私たちは、その一つ一つを掘り起こし、島を訪れる人たちに紹介したいと考えています。

一方、私たちには、西表島という世界に誇る財産を護り、次の世代へと継承していく義務があります。自然や文化は人が訪れることによって、簡単に破壊される脆いものです。日本の観光地では、人間にとっての快適性や利便性を優先した観光を追求したために、多くの自然や文化が失われてきました。

このように観光と自然保護は、相反するものと考えられてきました。今、世界的にこの二つを融合させ、両立させようという動きが始まっています。自然や文化を傷めることなく持続させていくことを活動の最低条件とする旅行形態－エコツーリズムの模索が始まっているのです。

エコツーリズムは、地域の自然と文化の保護とより深い理解を求めるために、少人数を単位とした長期滞在を原則とします。野外では、自然解説指導員（インタープリター）による解説と指導により、野生生物との出会いや自然教育の場を提供していきます。生物にあわせた観察を行うため、夜間や早朝の野外活動などもプログラムの中に盛り込まれます。また、滞在は、地域の方とのふれあいの場であることから、既存の民宿や旅館を活用します。宿の主人との語らいの中から、直接地域の生活文化と触れあう機会を持ちます。そして、このような旅行を体験した人は、再び西表島を訪れてくれることでしょう。

よって、私たちは、ここに西表島エコツーリズム協会を設立し、西表島におけるエコツーリズムの確立を図ることにしました。関係各位の御理解とご協力を賜りますよう、よろしくお願いいたします。

西表島エコツーリズム協会準備委員会
委員長　　中神　明

図2　西表島におけるエコツーリズム協会設立趣意書

(2) 会員ではないが，協会の活動をサポートする人々

①研究者

先にも述べたように，西表島は，復帰前からその固有の自然資源や文化が多くの研究者を引きつけてきた。島の自然や文化がよりよく残されていくことは研究者にとっても願いである。

研究を通じて明らかになる事実は，島民にとっても新たな島の発見であり，島の資源の価値を高める情報となる。研究者は，資源についての科学的な見方や，接し方のルール，各種の調査結果などを講演会や個人間の情報交換等によって伝えることにより，協会の活動を支えている。

②行政

国立公園を管理する環境庁や，国有林を管理する営林署などの国行政，沖縄県や竹富町などの地方自治体等は，調査事業や人材育成の支援などを通じて協会を支援している。

③財団・基金など

ガイドブックの発行や調査の実施，人材育成プログラムの実施など，助成金を活用した各種の活動を通じて協会の育成を支援している。

④観光業者

いくつかの大手観光業者は西表島在住ガイドなどとの提携により，地元企画のツアーを商品化するなど，西表島のラウンドオペレータとの協力を通じて西表島のエコツーリズムの推進に協力している。

構成メンバーを模式的に表したものが図3である。2000年5月現在，会員数は個人会員26名，事業所5社（13名），賛助会員（島外）4名，計43名である。

3. エコツーリズム開発のための資源調査

本節では，西表島におけるエコツーリズム協会発足の土台となった資源調査の手法について述べる。

この調査は，環境庁が，国立公園の利用者の増加と自然とのふれあいの促進を図るために開始した「自然体験活動推進方策検討」事業の一環として行われたものである。環境庁は1989年から3カ年にわたって奥日光，八丈島，西表島をケーススタディの対象地に選定し，新たな国立公園の利用方策の提案を求めた。

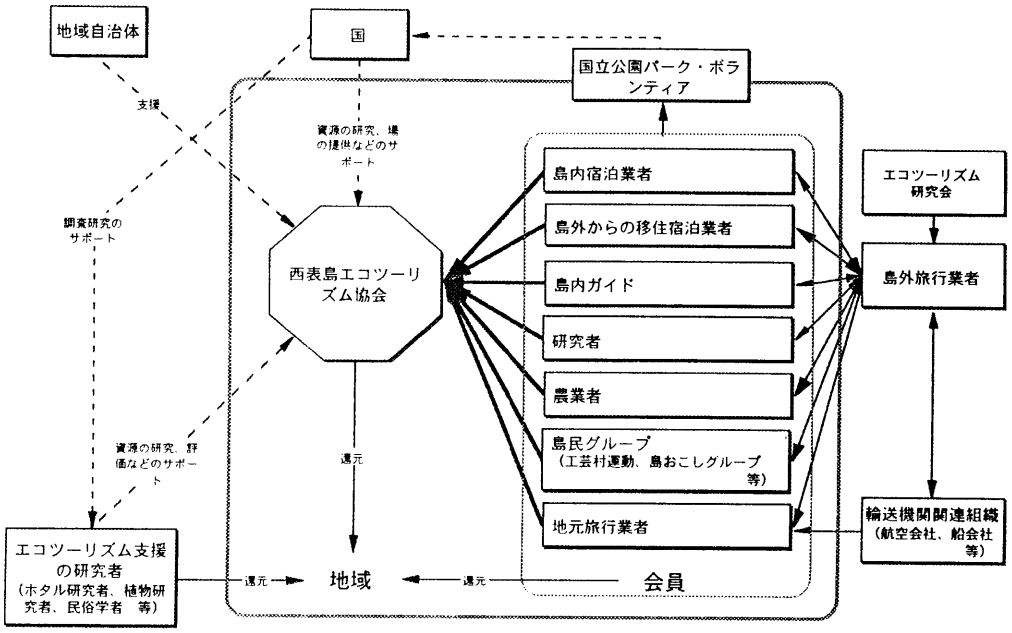


図3　西表島におけるエコツーリズム協会に関与する人々

最終年度である3年目の1991年度には，西表島をエコツーリズム展開のケーススタディ地域として調査を進めることにしたのである。

資源調査は（財）国立公園協会を通じて（財）自然環境研究センターが担当した。調査作業は次の5点の把握を目的とし，3.1以降のプロセスを経て行われた。

①西表島の野生生物相及び，固有種・特産種の多様性と生態系の構造。

②西表島の人々が太古の時代より今日に至る歴史の中で培ってきた歴史資源・文化資源の情報。

③自然と人の暮らしの係わり方が生活の中に色濃く残る生活文化としての知恵や伝承，活動内容の情報。

④以上のポテンシャルをもった資源がみられる西表島に於ける具体的な場所や地域。

⑤さらにそれらを体験するための環境への配慮事項や，社会的条件。

3.1 ヒアリング準備作業

①第一ステップ：人材リストづくり

「西表島研究会」のメンバーを通じ，まず，人材リストづくりを行った。西表島において様々な職種に携わっている人々や自然と人の関わりについて詳しい人，島の歴史をよく知る人，研究者等，老若男女併せて200人近い人々のリストができあがった。

②第二ステップ：調査グループのスタディワーク

西表島について予備知識を得るために，入手可能な資料をもとに事前にスタディを行い，西表島についての基礎知識を培うとともに，島でのヒアリングのポイントを絞った。その結果，自然，歴史・文化，生活文化，信仰，子供の遊び，に分けて調査を行うことにした。

③第三ステップ：ベース地図の作成

資源調査のアウトプットとして資源分布図を作ることを決定し，ヒアリングの際に25000分の1地図を持参し，話を聞きながら，これに資源を落としていくことにした。

このヒアリング調査のために使用したベース地図は，25000分の1地形図上に地名を落とした地名地図である。山口女子大学の安渓遊地教授と，当時長崎大学大学院に在籍していた山口景子さんの協力を得，未だ研究途上であった西表島の詳細な地名分布図を借用し，これを地形図上に落としたのである。この地図はヒアリングの現場で実に多大な成果を上げた。島民の多く（特に高齢者）は，非常に微細な地形と地名で地理を把握しているからである。

3.2 ヒアリング調査

以上の準備を終えた後，のべ180人のスタッフにより，島民の40人を対象に聞き取りを行った。その成果をテーマ別の地図に編集し，コード番号をつけてリストを作成し，地図とリストの対照で資源分布がわかるようにした。

3.3 島民を通じた調査

調査員による調査と並行して，キーパーソンとなる人々を通じたヒアリング調査と，小学校の先生を通じた子供の遊び場調査を依頼した。小学校の先生には，子供たちが遊ぶ場所と，親子が遊ぶ場所を地図に落としてもらった。

3.4 その他の調査

ヒアリングによる調査以外に，次の調査を行った。

①文献調査：聞き取りでは拾えなかった情報を抽出し，マップに落とした。

②動植物リスト：過去に行われた調査結果から，西表島に生息する動植物のリストを作成した

③西表島の概要のとりまとめ：文献調査とヒアリングから，西表島の人と自然のふれあいに関する概要をまとめた

④フェノロジーガイドの作成：ヒアリングを行いながら，西表島の一年間の動植物と人の暮らしの流れについてメモ書きしておき，これを時系列で見ることができるカレンダーのようなものに加工した。フェノロジーとは生物暦のことであるが，西表島のフェノロジーには，これに人々の暮らしの暦や行事暦を追加し，いつ・どこに・何が生息しているのかがわかるだけでなく，西表島において人々と生物がどのように呼応しながら1年という時の流れを送っているのかを示すものとした。

この調査で得られた情報は，島の価値に関する貴重な情報源として，A4版135頁の報告書と，2万5千分の1の地図にびっしりと書き込まれた情報地図14枚（7種類，東部・西部各1枚で1セット），それにこの地図を解説するA4版200頁の資料編としてまとめられた。

報告書には以下の内容が網羅されている。

・西表島野生生物目録
・西表島関連文献リスト
・キーパーソンリスト
・資源解説リスト及び資源マップ
　a.野生生物／b.活動／c.生活／d.歴史
・フェノロジーカレンダー（生物と人の暮らしの暦）

この調査を通して，島の全般的な資源の価値が再認識され，島民には自分の部落ばかりでなく，他の部落の価値にも気づくという効果があったほか，調査結果をもとに先述のガイドブックが編纂された。

以上の成果物の例を図4〜7に挙げた。

西表島産哺乳類目録

INSECTIVORA	モグラ目（食虫目）
Soricidae	トガリネズミ科
Suncus murinus (Linnaeus, 1766)	ジャコウネズミ
Suncus murinus temmincki (Fitzinger, 1868)	リュウキュウジャコウネズミ
CHIROPTERA	コウモリ目（翼手目）
Pteropodidae	オオコウモリ科
Pteropus dasymallus Temminck, 1825	クビワオオコウモリ
Pteropus dasymallus yaeyamae Kuroda, 1933	ヤエヤマオオコウモリ
Rhinolophidae	キクガシラコウモリ科
Rhinolophus cornutus Temminck, 1835	コキクガシラコウモリ
Rhinolophus imaizumii Hill Yoshiyuki, 1980	イリオモテコキクガシラコウモリ
Hipposideridae	カグラコウモリ科
Hipposideros turpis Bangs, 1901	カグラコウモリ
Vespertilionidae	ヒナコウモリ科
Miniopterus fuscus Bonhote, 1902	リュウキュウユビナガコウモリ
RODENTIA	ネズミ目（齧歯目）
Muridae	ネズミ科
Rattus rattus (Linnaeus, 1758)	クマネズミ
Rattus norvegicus (Berkenhout, 1769)	ドブネズミ
CARNIVORA	ネコ目（食肉目）
Mustelidae	イタチ科
Mustela itatsi Temminck, 1844	イタチ
Mustela itatsi itatsi Temminck, 1844	ホンドイタチ
Felidae	ネコ科
Felis catus Linnaeus, 1758	<ノネコ>
Mayailurus iriomotensis Imaizumi, 1967	イリオモテヤマネコ
ARTIODACTYLA	ウシ目（偶蹄目）
Suidae	イノシシ科
Sus riukiuanus Kuroda, 1924	リュウキュウイノシシ
Bovidae	ウシ科
Capra hircus Linnaeus, 1758	ヤギ

図4　西表島産野生生物目録

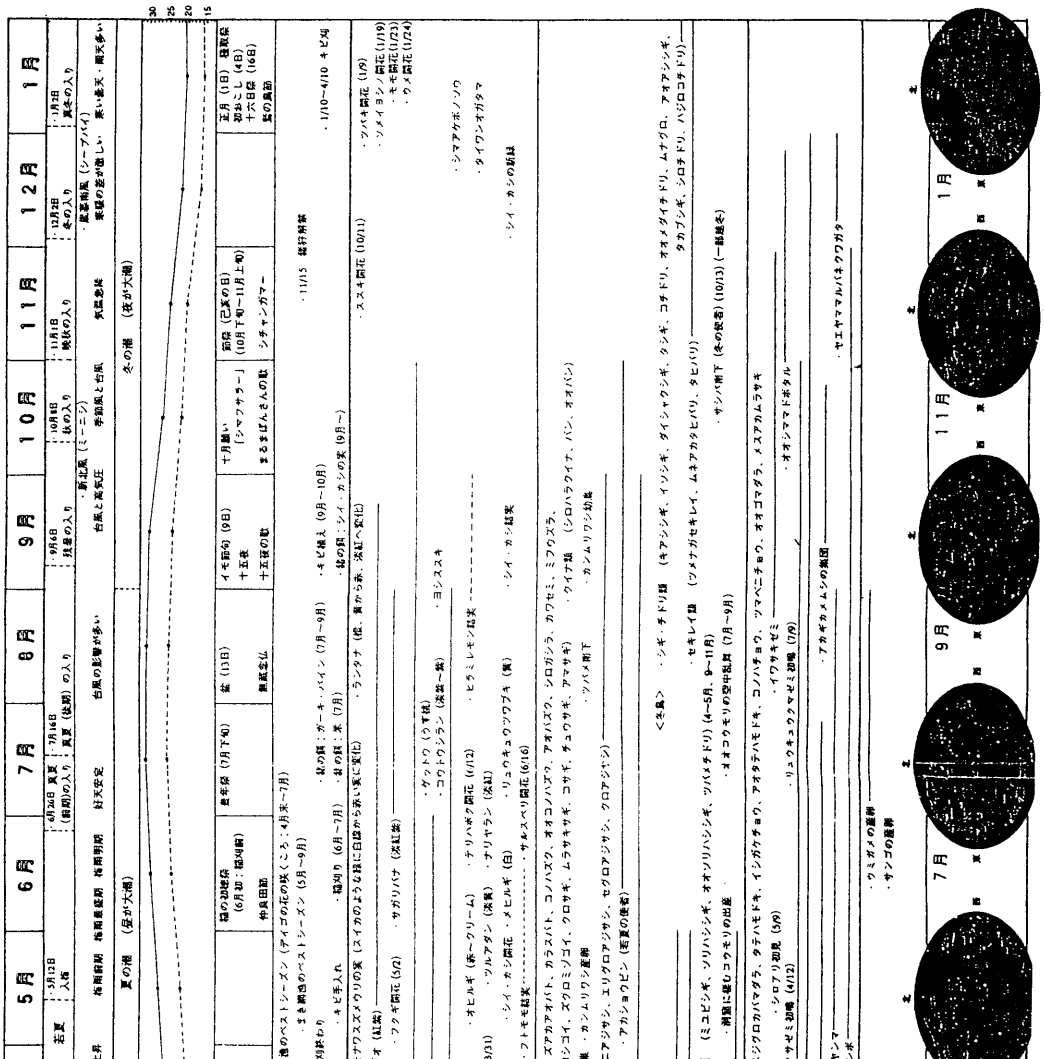


図5　西表島資源調査マップ

資源リスト（活動編：資源数187）

地図No.分類code	資源名	場所名	季節・時間帯	条件
25— S — 15	サガリバナの群生地	ウタラ川（浦内川の支流）	通年	
58— S — 1	渓流の植物などいろいろな植物が見られるところ	ユツン川	シマアケボノソウの花期；12〜1	
58— S — 3	ヤエヤマヒメウツギの群落	ユツン川	3月頃？	
59— S — 1	セイシカ	カンピレーの滝周辺	花期3月	
59— S — 2	ヒメヨウラクヒバ、コブラン他、渓流の植物	カンピレーの滝の先	リュウキュウツワブキの花期；	
59— S — 3	ニッパヤシ	内離島	通年	
59— S — 4	マツムラソウ、ヤエヤマウツギ群落、オオシロショウジョ	ユツン川上流	マツムラソウ：8月花、　シマア	
59— S — 5	マツムラソウ、ヤエヤマウツギ群落、他	ユツン川上流	マツムラソウー花期8月／シマア	
59— S — 6	シマアケボノソウ小群落	琉球大学熱帯研究所の先を左折した林道の先	花期12〜1月	
59— S — 7	ナリヤラン群落	白浜	花期8〜10月	
59— S — 11	ナリヤラン群落	琉球大学熱帯研究所の先	花期8〜10月	
62— S — 6	営林所の研究用熱帯植物植林地	浦内川の船着き場付近	観時中	
64— S — 1	オオタニワタリ	浦内川下流	通年	
65— S — 2	亜熱帯観察林	亜熱帯観察林	通年	
66— S — 3	オオタニワタリ	仲間川の湿地	通年	
67— S — 12	ナリヤラン群生地	浦内〜浦内橋	6、7月	
67— S — 13	ナリヤラン群生地	浦内〜浦内橋	6、7月	
67— S — 14	サガリバナ群落	琉球大熱研の奥を右折した林道周辺	7、8月	
67— S — 15	コウトウシラン	琉球大熱研の奥を右折、林道手前	5月	
67— S — 22	ヒカゲヘゴ群落	イタジキ川流域	通年	
67— S — 23	ヒカゲヘゴ、セイシカ、モダマ	ユツン川流域	セイシカの花期；3〜4月	
68— S — 2	ヒカゲヘゴの群落	クーラ川	通年	
68— S — 3	ナリヤランの群落（西表では最大）	ウチナッス（浦内の南）	花期；夏	
75— S — 1	花暦作成の調査ルート	白浜〜上原	通年	
82— S — 33	キーウィの原種	亜熱帯観察路の先の先	不明	
82— S — 34	パッションフルーツ	亜熱帯観察路の先	不明	
82— S — 35	キーウィ	亜熱帯観察路のちょっと先	不明	

図6　西表島資源リスト


西表島フェノロジーガイド一覧
2月
3月
4月
5月
6月
7月
8月
9月
10月
11月
12月
1月
沖縄の季節区分
2月26日 寒さの入り
3月15日 春の足音の入り
4月1日 桜前の入り
若夏
5月12日 入梅
6月16日 梅雨明け
7月16日 真夏（猛暑）の入り
9月16日 秋雨の入り
10月16日 秋の入り
11月16日 晩秋の入り
12月22日 冬の入り
1月5日 寒冬の入り
気象
寒い春天 雨天多い
カツマイ（2月～4月20日）
新緑伸張
気温急上昇
梅雨前期
梅雨最盛期
梅雨明期
好天安定
台風の影響が多い
台風と高気圧
新北風（ミーニシ）
季節風と台風
寒暖無風（シークイバイ）
寒さ厳しい 寒い春天 雨天多い
寒暖の差が激しい
湖
冬の潮（夜が大潮）
夏の潮（昼が大潮）
冬の潮（夜が大潮）
最高気温
最低気温
行事
民間
春の彼岸
二月タカビ（甲・乙の日）
上巳の節句
雪踏み（旧3/3）
いやり節
種子蒔き
苗植えの歌
田植えの歌
種の節供
（6月初：稲の種）
仲良田節
豊年祭（7月下旬）
盆（13日）
豊年祭
イモ掘り（9日）
十五夜
十五夜の歌
十月踊い
「シマウサラー」
（10月下旬～11月上旬）
まるまげんさんの歌
節供（己亥の日）
（10月下旬～11月上旬）
シチャンガマー
正月（1日）雑煮祭
初おこし（4日）
十六日祭（16日）
粟の餅節
人文
・2/15 結神終わり
・4/10 ヤビル終わり
・海のベストシーズン（アイゴの花の咲くころ：4月末～7月）
・まき網漁のベストシーズン（5月～9月）
・イモ植え
・福知り（6月～7月）
・11/15 結神解禁
・1/10～4/10 ヤビル
・田植え（2月～3月）
・北の風：ガーネ・バイン（7月～9月）
・イモ掘り（9月～10月）
・北の風：シイ・カシの実（9月～）
植物
・タイワンヤマツツジ開花（2/7）
・オキナワスズメウリの実（スイカのような甘に日増から赤い実に変化）
・ランタナ（橙、黄から赤、次紅へ変化）
・セイシカ（淡紅紫）
・グンバイヒルガオ（紅紫）
・ススキ開花（10/11）
・ツバキ開花（1/9）
・ソメイヨシノ開花（1/19）
・ヒルギモドキ（白）
・フクギ開花（5/2）
・サガリバナ（淡紅紫）
・モモ開花（1/23）
・ウメ開花（1/24）
・オオハマボウ（黄）
・ウツボネ（黄）
・ヤエヤマコンロンカ（黄）
・ゲットウ（うす紫）
・コウトウシラン（淡紫～紫）
・ヨシススキ
・ノアサガオ（赤）
・ヒラミレモン（シークヮーサー）開花（2/26）
・オヒルギ（赤～クリーム）
・テリハボク開花（1/12）
・ヒラミレモン結実
・シマアカボノソウ
・ディゴ開花（3/6）・テッポウユリ開花（3/31）
・ツルアダン（淡黄）
・ナリヤラン（淡紅）
・タイワンオガタマ
・ディゴ（真紅）
・シイ・カシ開花
・メヒルギ（白）
・リュウキュウツツグサ（黄）
・シイ・カシ結実
・シイ・カシの新緑
・フトモモ（淡黄）
・フトモモ結実
・サルスベリ開花（6/16）
鳥
<留鳥：一年中生息している鳥>
・カンムリワシ、オシアカオバト、カラスバト、コノハズク、オオコノハズク、アオバズク、シロガシラ、カワセミ、ミフウズラ、
・ウグイス初鳴（2/14）
・サギ類（リュウキュウヨシゴイ、スクロミゾゴイ、クロサギ、ムラサキサギ、コサギ、チュウサギ、アマサギ）
・クイナ類（シロハラクイナ、バン、オオバン）
・カンムリワシ営巣・カンムリワシ産卵
・カムルのコースと産卵
<夏鳥>
・アジサシ類（ベニアジサシ、エリグロアジサシ、セグロアジサシ、クロアジサシ）
・ツバメ飛下
・カンムリワシ幼鳥
・サンコウチョウ
・アカショウビン（夏翼の成鳥）
・ツバメ北上初見（3/19）
<冬鳥>
・シギ・チドリ類（キアシシギ、イソシギ、ダイシャクシギ、クシギ、コチドリ、オオメダイチドリ、ムナグロ、アオアシシギ、タカブシギ、シロチドリ、ハジロコチドリ）
<旅鳥>
・ヤツガシラ（3～4月）
・シギ・チドリ類（ミユビシギ、ソリハシシギ、オオソリハシシギ、ツバメチドリ）（4～5月、9～11月）
・セキレイ類（ツメナガセキレイ、ムネアカセキレイ、タヒバリ）
・ヤツガシラ（冬の越冬）（10/13）（一部越冬）
・オオコウモリの空中乱舞（7月～9月）
・サシバ南下（冬の越冬）
・ヤツガシラ
・ヤツガシラ
・サシバ北上
・ヤツガシラ
・ヤツガシラ
・ヤツガシラ

4. エコツーリズム協会の活動

西表島エコツーリズム協会は，次の3つの柱を活動内容としてきた。すなわち，①会員・島民に対するエコツーリズムの普及啓発活動，②自然環境と伝統文化の保全と継承活動，③調査および情報収集・提供活動等である。1998年に第2代会長に移行してからは，これに④部会（海の自然部会・山の自然部会・文化部会・環境部会）制度の設置と各部会個別の企画・提案による活動の実施，がつけ加えられた。

4.1 会員・島民に対する普及啓発活動（表1 参照）

(1) 講演会，講習会等の実施

西表島エコツーリズム協会は，設立初年度から不定期での講演会を企画し，協会員だけでなく島内に参加を呼びかけて実施してきた。講演会の目的は，西表島の自然・文化・歴史などに対する新しい見方を島民が学ぶことと，西表島と研究者・専門家間のネットワークを強めることである。

講演会の講師は，西表島をフィールドに調査を行っている研究者や，協会員が話を聞きたいと希望する講師など多種多様であり，島外の専門家だけでなく島内（八重山一帯を含む）の専門家も講師となっている。テーマは自然・歴史・文化や暮らしなど多岐に亘っている。

(2) 観察会の実施

資源調査等を兼ねて自然観察会等を実施し，会員間で資源に関する情報の共有とガイド法の研修を行っている。

(3) 島民対象の各種協力

エコツーリズムの考え方を広く普及するべく，地元中学校のエコツアー体験学習のガイドを行ったり，学校での講演会を実施するなど，島民対象の各種協力を行っている。

4.2 自然環境と伝統文化の保全と継承

(1) 資源調査（表2 参照）

①「ピナイサーラの滝」資源調査

1997年の初夏（若夏），急速に旅行者による利用が盛んになってきた船浦湾の「ピナイサーラの滝コース」を対象に，資源調査を実施した。「ピナイ」とはヒゲ，サーラとは「・・・のようだ」という意味である。このコースは，海岸・干潟からマングローブ林を経て亜熱帯林を抜け滝に至るまでの，西表島の代表的な自然環境がほぼ全て体験できるコースである。

調査目的は資源情報の収集と問題点の発掘及び参加者の間で資源の意味の共通認識を深めることであった。資源調査は各自地図をもって歩きながら，これはと思う資源がある場所，感じたこと，問題点等を記入し，ポラロイドカメラで撮影を行った。

表 1 普及啓発活動に関するリスト

	年	月		内容	講師
講演会	1996	11	第1回	スイショウガイ科巻貝類の繁殖生態	上野信平
		11	第2回	世界的な視野から見た西表島の自然	浜野安弘
		12	第3回	ヤマネコ交通事故防止キャンペーン	環境庁
		12	第4回	イリオモテボタルの生態（観察会兼ねる）	大場信義
	1997	1	第5回	エコツーリズムを産業として成功させるには	真板昭夫
		2	第6回	西表島の魅力とその活用	花井正光
		2	第7回	琉球列島のエビ・カニ	諸喜田茂充
		3	第8回	西表島の歴史	安渓遊地
		5	第9回	上原村の歴史	石垣金星
		7	第10回	八重山の郷土料理	石垣愛子
		7	第11回	八重山の踊りと織物	新城知子・音絵・石垣昭子
		12	第12回	アイヌ文化	貝澤耕一・美和子
	1998	1	第13回	ホタルの不思議（観察会兼ねる）	大場信義
		3	第14回	身近なチョウたち	長嶺邦雄
		3	第15回	マングローブ	小菅丈治
	1999	10	第16回	マングローブ植物の形態及び施設見学	高相徳志郎
	2000	3	第17回	ガラパゴスのエコツーリズムより、西表島のエコツーリズムを展望する	真板昭夫
		7	第18回	予定	千石正一
観察会・鑑賞会	1996	12	第1回	イリオモテボタル	大場信義
	1998	1	第2回	ホタルの不思議	大場信義
	1998	3	第3回	ヤエヤマボタルの観察会	
	1998	11	第4回	夜の海の自然観察会	海の自然部会
	1999	2	第5回	猪罠・植物観察（大見謝）	山の自然部会
	1999	2	第6回	民謡ふる里巡りと踊り観賞会（バスツアー）	協会
	2000	1	第7回	古見岳登山と自然観察会	山の自然部会
	2000	2	第8回	ゲータ川周辺自然観察会	山の自然部会
	2000	2	第9回	古見岳	山の自然部会
講習会	1996	11	第1回	自然観察指導員	NACS-J
	1997	1	第2回	NAUIライフセーバー	うなり崎
	1999	11	第3回	アダン葉ぞうり・材料取り、作成、仕上げ	星公望

表2　資源調査の実施

年	月			内容	講師
1997	3		第1回	ピナイサーラ	
1997	3		第2回	滝の測量	
1997	10		第3回	秋のピナイサーラ調査	
1998	7		第4回	東部	
2000	1		第5回	古見岳登山と自然観察会	山の自然部会
2000	2		第6回	ゲータ川周辺自然観察会	山の自然部会
2000	2		第7回	古見岳	山の自然部会

資源調査のフローは図 8 の通りである。

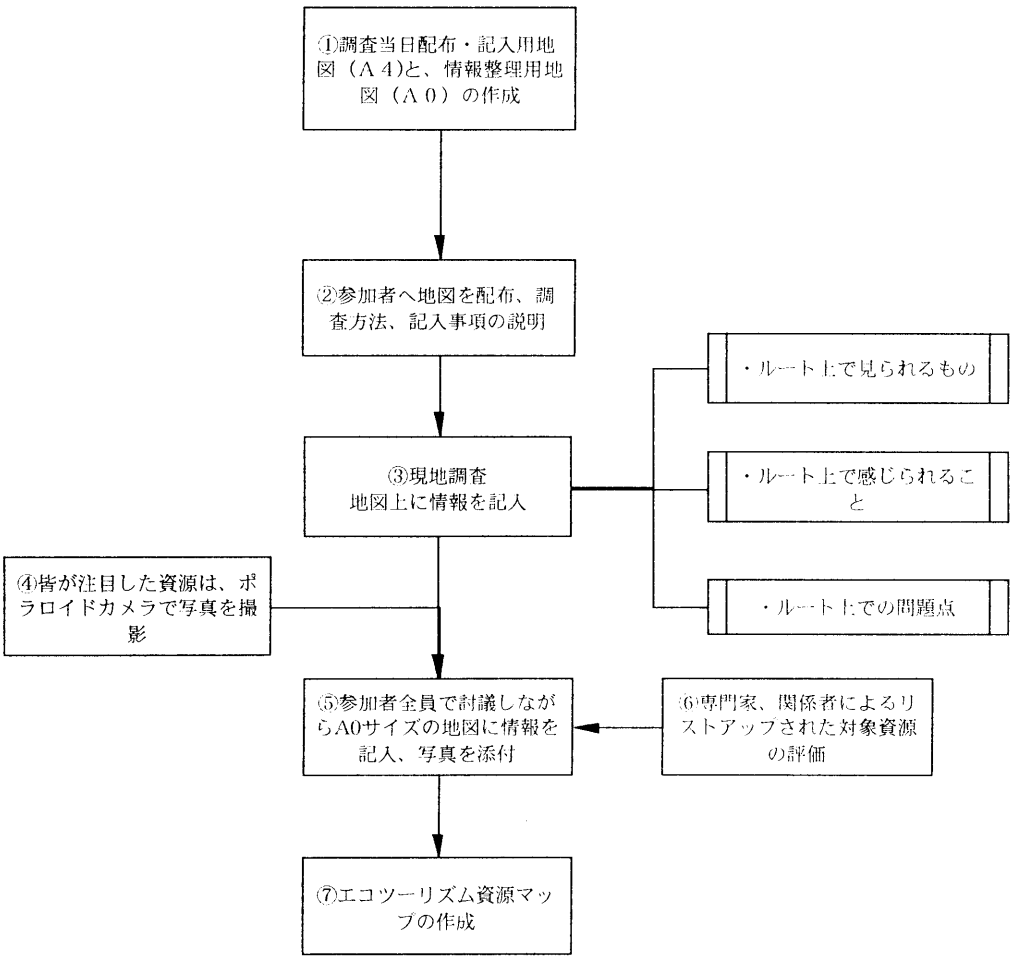


図8 ピナイサーラの滝資源調査フロー

これらの資源調査の効果は以下の3点に集約できる。

・参加者間での意識の共有

調査にはガイドと研究者が同行し，資源やルートの解説を行ったため，参加者にはピナイサーラ地域の資源の特性の意味や問題点等が共有され，資源把握の大切さが認識された。

・問題点の共有化

調査結果はガイドマップにまとめて編集し，島内の主要箇所に掲示した。不特定多数の人目に触れることによって資源の利用と保全に関する討議が積極的になされるよう促されている。この結果，エコツーリズムサイトの利用上の問題点を住民，旅行者，エコツーリズム関係者間で共有化することができた。

・継続モニタリングのスタート

ピナイサーラは，西表島の利用に関する利用状況による資源へのインパクトを評価する代表的モニタリングポイントとして，今後も継続して調査を行うことを決め，さっそく同年秋に第2回調査を行った。

②東部地域およびその他の地域

自然観察を兼ねた資源調査や漂着物調査等を東部地域や古見岳，ゲーダ川周辺，トゥドゥマリの浜等で行っている。

(2) 船浦湾における水陸両用艇への対応

ピナイサーラの滝周辺で資源調査を行った直後，その一帯の干潟に第二次世界大戦中にオーストラリアで使用されていた戦車DUKW（ダック）を搬入し，ツアー活動を行おうとする業者が現れた（図9参照）。国立公園地域ではないことから自然公園法上は問題がないものの，営業を許可した際には，干潟生物や静けさに対しての影響，また観光客の印象等を著しく損なう可能性がある。西表島エコツーリズム協会は，資源調査の結果等を例証しながら，意見書を記して竹富町に申し入れをすると共に，八重山毎日新聞（地元紙）によるDUKWのテスト走行に立ち会ってコメントを発表するなど，反対行動を展開した。結果として水陸両用艇の干潟内での走行は中止された。

(3) 伝統文化の保全と継承

西表島は，自然との関わりから数々の民謡が生まれた島である。島内を巡ると民謡に唱われた風景や発祥の地が多数ある。協会は，民謡ふる里巡りツアーを企画し，島民の参加を呼びかけた。またアダンの葉を使った民具作りの名人等から技を伝授してもらうなど，伝統文化の保全と継承につながる体験活動を企画・実践している。

八重山毎日新聞 (97.6.22 八重山毎日)

西表島エコツーリズム協会 「計画反対」を決議

本土系企業の水陸両用車観光計画

「ダメージ大きすぎる」

24日に会社側と話し合い

【西表】本土系の観光会社、株式会社南表タックアー（本社・竹富町上原、幸下和義代表取締役）が船浦湾の干潟に水陸両用車を走らせて観光事業を行うとしている計画について、西表島エコツーリズム協会（中神剛会長）は十六日の総会で、計画反対の決議を行った。「自然に対するダメージが大きすぎる」などの理由。二十四日夜には、同社側と両協会との間で話し合いが行われる予定。この問題について地元では話し合いの場が設けられるのは初めて。地元では注目、自然に負担をかけない観光のあり方について関心が高まっており、同社の計画も慎重に進められている。



タイヤ。21日午後4時20分ごろ、船浦湾の干潟で撮影。観光客を乗せた水陸両用車が走る数多くの地元の車をはねている。

■計画

同社の進出計画は、船浦湾の干潟にヒナイサーラ（船浦湾の干潟）と呼ばれる場所にヒナイサーラの湿地帯に橋が架けられ、西田川やヒナイ川を渡るコースを計画し、沖縄総合事務局に旅客運送の許可を申請している。

マングローブの湿地は、生態学的に極めて貴重とされる。生態系への配慮について、同社本部長は「自然を壊すと観光の目玉はなくなるが、ある程度は慎重になってもやむを得ない。守るものは守らなければならないが、人間の生活も守らないといけない」と述べ、一タイヤの生活は、人が歩くのと同じくらい。（例えばミナミコメツキガニは、隠蔽用巣）を潮内に持ち込むこと自体、考えられない。（中神会長）と強く反発し（同社の計画は）将来のために自然をこのように残していくのが、という視点が欠けている（同）と批判する。

協会は二十四日の話し合いで、検会の反対決議や同社に伝えるとともに、事業計画や事業に取り組む考えなどを確認することにしている。

協会によると、同社を使って観光を行っている（観光客を乗せる数台（個人も、利用者がどのようにコースを楽しめばいいのかを示す指針を協議していくことになっているだけに、水陸両用車の乗り入れはエコツーリズム協会にショックを与えている。

エコツー協会は「（小な自然なので、少しでもダメージを減らそうとしているし、世界の流れもそうなっているものだろう。それがあるから、このような乗り物（水陸両用車）を潮内に持ち込むことに、世界の流れもそうなっているものだろう。それがあるから、このような乗り物（水陸両用車）を潮内に持ち込むことに」（中神会長）と強く反発し（同社の計画は）将来のために自然をこのように残していくのが、という視点が欠けている（同）と批判する。

協会は二十四日の話し合いで、検会の反対決議や同社に伝えるとともに、事業計画や事業に取り組む考えなどを確認することにしている。

協会によると、同社を使って観光を行っている（観光客を乗せる数台（個人も、利用者がどのようにコースを楽しめばいいのかを示す指針を協議していくことになっているだけに、水陸両用車の乗り入れはエコツーリズム協会にショックを与えている。

エコツー協会は「（小な自然なので、少しでもダメージを減らそうとしているし、世界の流れもそうなっているものだろう。それがあるから、このような乗り物（水陸両用車）を潮内に持ち込むことに

■反発

船浦湾からヒナイサーラに至る場所は、西表島エコツーリズム推進協議会がエコツーリズムのモデル的なコースとして調査・研究を行ってきた。協議会はすでに現地調査を終えたが、今後も、利用者がどのようにコースを楽しめばいいのか

■島内観光に変化

マングローブの湿地の中を「大きな船」で、排気が

業者、船が機によるツアーが一業者。

マングローブを観光客を乗せた水陸両用車が走る。

ヒナイサーラに至る場所は、西表島エコツーリズム推進協議会がエコツーリズムのモデル的なコースとして調査・研究を行ってきた。協議会はすでに現地調査を終えたが、今後も、利用者がどのようにコースを楽しめばいいのかを示す指針を協議していくことになっているだけに、水陸両用車の乗り入れはエコツーリズム協会にショックを与えている。

エコツー協会は「（小な自然なので、少しでもダメージを減らそうとしているし、世界の流れもそうなっているものだろう。それがあるから、このような乗り物（水陸両用車）を潮内に持ち込むことに

■計画

同社の進出計画は、船浦湾の干潟にヒナイサーラの湿地帯に橋が架けられ、西田川やヒナイ川を渡るコースを計画し、沖縄総合事務局に旅客運送の許可を申請している。

マングローブの湿地は、生態学的に極めて貴重とされる。生態系への配慮について、同社本部長は「自然を壊すと観光の目玉はなくなるが、ある程度は慎重になってもやむを得ない。守るものは守らなければならないが、人間の生活も守らないといけない」と述べ、一タイヤの生活は、人が歩くのと同じくらい。（例えばミナミコメツキガニは、隠蔽用巣）を潮内に持ち込むこと自体、考えられない

図9　八重山毎日新聞の記事

(4) ガイドラインの制定

協会設立から4年経った2000年5月，ようやく協会としてのガイドラインが制定された。過去に環境庁がガイドラインづくりを進めようとしたことがあったが，上から押しつけられる形でのルールづくりに対して会員の反発を招き，取りやめとなった経緯がある。

ガイドラインは，4つの部会それぞれが提案したものをまとめる形で決められた。内容は観光客向けとなっており，以下の通りである。

西表島エコツーリズム協会ガイドライン（同協会パンフレットより）

＊むやみに動植物を採集しないようにしましょう。
＊ゴミは捨てずに持ち帰りましょう。
＊火を焚くときは，取り扱いに注意しましょう。
＊山道や砂浜などに車を乗り入れないようにしましょう。
＊車を運転するときは，動物の飛び出しに注意しましょう。
＊島の人にあったら挨拶しましょう。
＊御嶽（拝所）に行き当たったときは，まずは手を合わせ，旅の安全や健康などを祈りましょう。
＊古い歴史をもつ祭事や行事に参加する場合は，前もって島の人とコミュニケーションをはかりましょう。

4.3 各種情報の収集と発信

(1) 野生生物保護センターとの提携

西表島には，環境庁のイリオモテヤマネコ保護活動の拠点として，1995年に設立された野生生物保護センターがあり，協会設立当初は事務所を同施設内に置いていた。センターは協会の活動に場所の提供や情報の提供，活動の支援等の形でさまざまな支援を行っている。とくにセンターにおける野生生物情報システム（図10）である，「生き物掲示板」や「生き物目撃情報ポスト」（図11）に寄せられる生物目撃情報は，月別に集計された後，協会事務局を通じて会員に配布されている。

(2) F-netによる情報提供

自然情報だけでなく，祭事や各公民館主催の活動，講演会等の告知をNTTのファックス送信サービス（F-net）を通じて，各会員に発信している。

4.4 部会活動

1999年からは，協会内に・海の自然，・山の自然，・文化，・環境の4つの部会を設け，各部会ごとにイベントや勉強会の企画を立てて実施している。このことにより，各会員が意見を出したり発案をしやすくなり，会員主導の組織の性格を強めることにつながっている。

また2000年7月には文化部会主催による「西表島文化祭」を開催し，民謡，舞踊，染織などの伝統芸能・芸術を披露しあい，大いに盛り上がった。今後もエコツーリズム協会を核に西表島の文化のほりおこしを進める予定である。

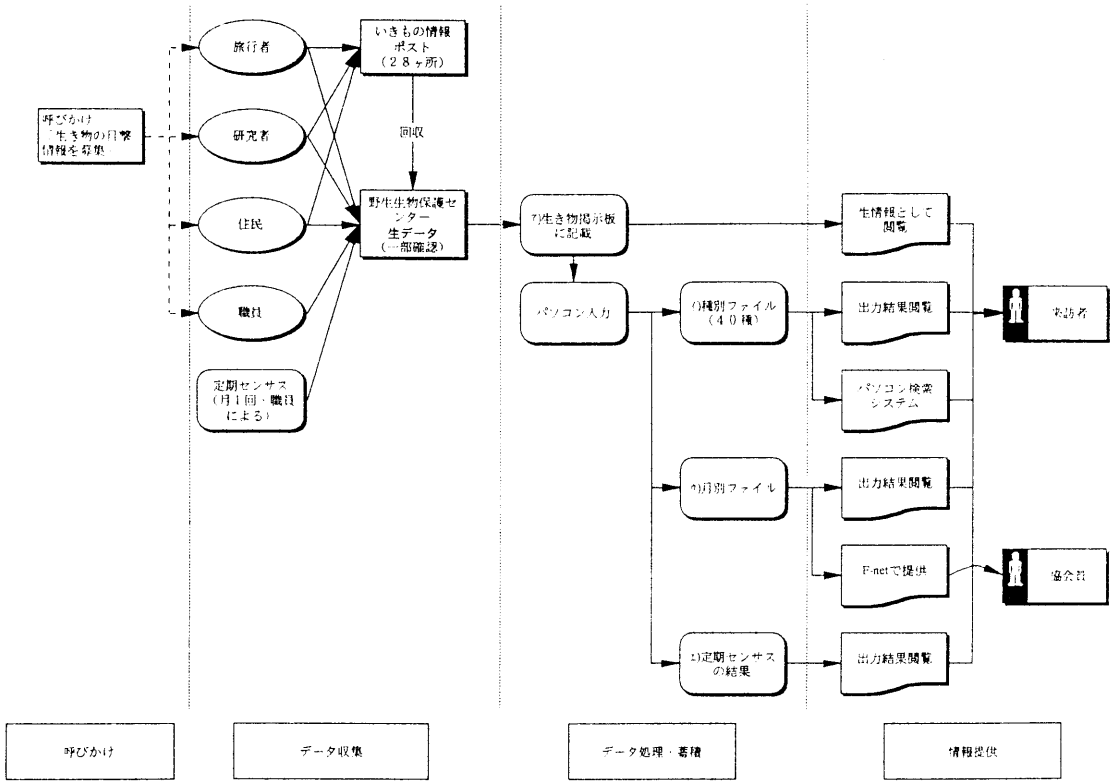


図10　野生生物保護センターを中心とする資源情報収集フロー

生きもの情報マップ

氏　名	(　才)	所　属		宿泊先	
住　所	(〒　-　)			電話番号	-　-

No.	年　月　日	種　名	時　間	場　所	環　境	備　考
1	199．．		:			
2	199．．		:			
3	199．．		:			
4	199．．		:			
5	199．．		:			
6	199．．		:			
7	199．．		:			
8	199．．		:			

※　下の地図上の目撃した場所に●とNo.を記入してください。

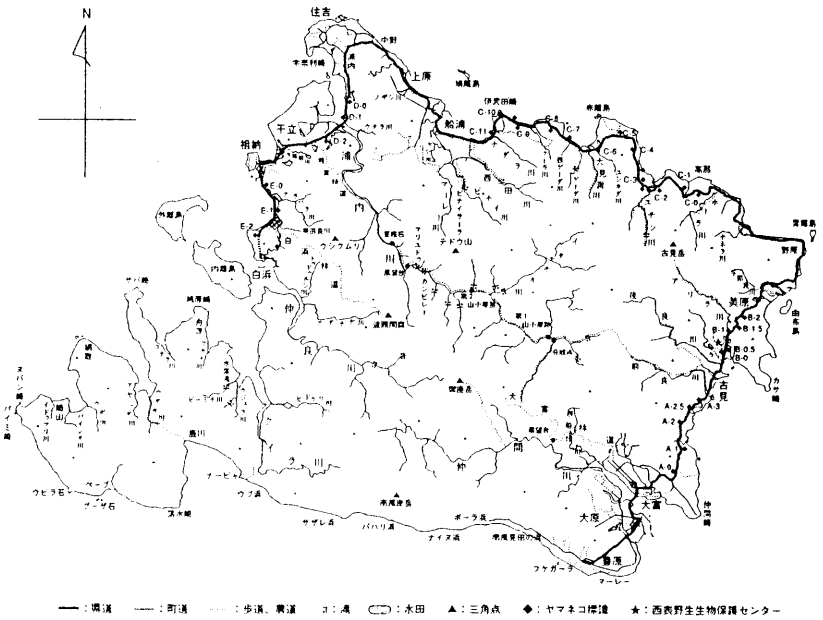


図 11 生き物情報マップ

5. エコツーリズムの効果と新たな課題への対応

協会設立から 4 年を経た結果として，西表島では次のような効果と新たに発生した課題への対応が認められる。

5.1 効果

(1) 西表島入域者数の増加

図 12 に示したように，竹富町の他の島々に比べ，西表島の入域者数は年々増加している。全てがエコツーリズムによる効果とは言えないものの，協会が設立された 1996 年以降の伸び率は大きいことは注目に値する。またカヌー等を利用するエコツアーと，マスを対象とするツアーの双方を扱っている業者へのヒアリングによれば，全顧客数に占めるエコツアー参加者の割合が毎年数％ずつ増加しているとのことであり，現在の協会員数人に対して観光業者へのアンケートおよびヒアリング調査によると 1999 年結果では受け入れ全旅行者のうちでエコツアー旅行者の占める割合は約 30％から 55％とのことであった。

(2) 協会の活動の活発化

協会のこれまで資源調査や講演会，部会による自主企画活動などの活動において，島民が参加できる機会を積極的に設けてきた。協会は徐々に島おこし団体の様相を帯びてきている。

(3) 若者の U ターン，I ターン

高校がない西表島では，子どもは一度島外に出る。その後帰ってくる若者が少なかったが，最近，外で仕事をしながら一年の半分は実家がある西表島に戻り，エコツアーガイドや海人（ウミンチュ）の仕事をこなす若者が誕生している。またこれらの若者達によって島内での音楽祭が開かれるなどエコツー協会を立ち上げた世代より一回り若い世代層による新たな島おこし運動への波及が見られている。一方，若干ではあるが，島内にある業者への就職を望んで移住する若者の増加も見られるようになってきている。

(4) 自治省，環境庁による表彰

西表島エコツーリズム協会は，これら一連の地域づくりや環境保全への取り組みが認められて，2000 年 1 月 14 日には自治省「地域づくり自治大臣賞」を受賞し，同年 4 月 29 日（みどりの日）には「自然環境保全功労者環境庁長官賞」を受賞した。

(5) 資源管理への配慮

エコツーリズム協会の設立当初から，自然観察会や資源調査，野生生物保護センターとの情報交流などが行われてきた。その結果，自然・文化・歴史等の資源の把握とモニタリングが持続可能な観光の土台であるという意識が島内で共有されてきている。また，研究的な視点からの資源の見方だけでなく，地元でどのように使われてきたかといった地域独自の視点こそがエコツーリズムのプログラムの魅力の源である，という認識も育ち，住民がガイドを行うことの意味も浸透してきたと言える。

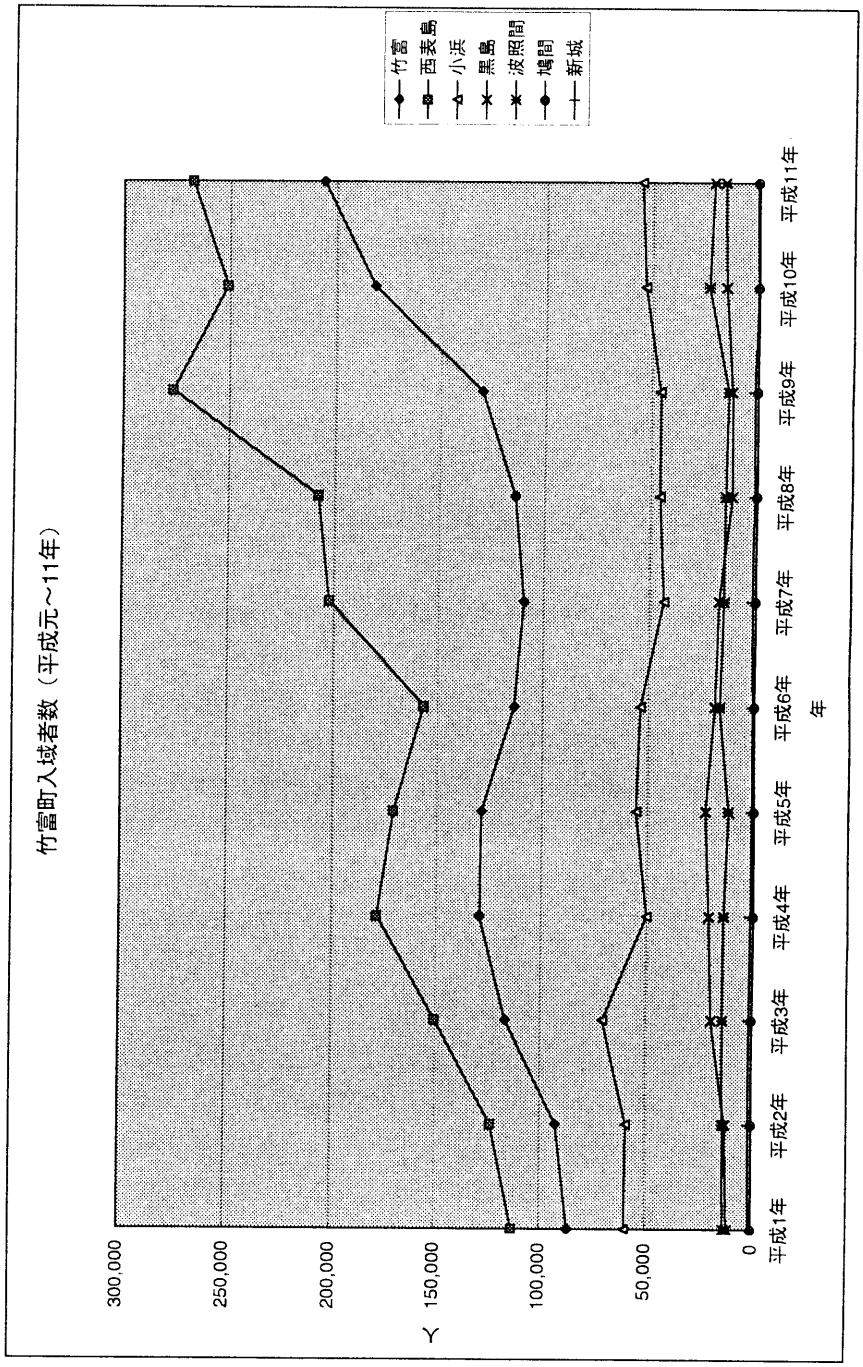


図 **12**　竹富町の各離島への入域者数の推移（平成元年～11 年）

5.2 課題

(1) 業者の急増による利用エリアの重複

西表島エコツーリズム協会は，日本で最初のエコツーリズム協会であったことから，日本におけるエコツーリズム先進事例として注目を受けることになった。当初は様子を眺められるに留まっていても，西表島のエコツアーがマスコミ等に取り上げられたり，西表島の自然が紹介されるようになって，にわかにカヌー業者が増えた。島外からやってくる場合も，島内在住者が転業する場合もあるが，現在20業社以上（うち西表島エコツーリズム協会の会員は6業者）が営業を行っている。業者の増加に伴って，発地側旅行業者との提携も盛んになり，エコツアーのエコツアーたる所以ともいうべき質の高いガイドによる勝負に先んじて，価格での競争が始まっており，無理なツアープログラムから海上での参加者の行方不明事故が起きるなどがあり，協会のみならず島全体のイメージダウンにつながらないよう，旅行業者全体の質をどう向上させるかという課題に直面している。

(2) 観光客の増加に適応したインフラの未整備

他の沖縄県の離島と同様，西表島もゴミや屎尿処理，汚水処理などのインフラ設備のキャパシティに限界がある。エコツーリズムも，観光であることから，これらの諸問題と無縁ではない。

現在，エコツアーのガイドの多くは，ゴミ持ち帰りの徹底やフィールドマナー等を呼びかけているので，無秩序に自然地にこれらを放置することは余りないといえるが，絶対数に対する対応策は，観光客の増加のスピードに比べて遅いといわざるを得ない。これらのことに対し，会員の一部では自ら積極的に地域の PTA などの活動に参加し，地区や集落を巻き込んでゴミ問題にかかわっていくといった，エコツーリズム協会と地域とのかかわりを広げていこうとする新たな動きが見られ始めている。

(3) エコツーリズム協会と地域との軋轢と解消

設立当初協会に対して好意的であった村民のなかで，協会の活動の活発化と経済活動の活発化が顕著になるに従い，地域の歴史，文化，自然資源の新たな発見や発掘は，協会員だけに利益を促すものであり，何ら自分達の利益につながらないとして協力を拒む人が出始めている。さらに観光客の増加はゴミ問題や風紀などに影響を及ぼすとして反発をしている村民も見られる。これらに対し協会では活動利益の一部を村民に還元し，より広範な支持を村民から得ようと，今年から

①協会主催の西表島文化祭の開催による村民との交流会の実施

②ポストカードの作成と，売り上げの一部を島の自然保護活動に還元するための基金の準備

③質の良いガイドの育成と，エコツーリズムのイメージの向上とにわかガイドとの差別

化のために，国，県や町に協力を求めてのガイド認定講座の導入の検討
などを開始し，課題に取組もうとしている。

6. エコツーリズムの発展要因

以上，西表島におけるエコツーリズム開発の発展段階を辿りながら，その効果と新たな課題と対応について述べた。西表島においてエコツーリズムが今日のような普及を遂げてきた背景には，エコツーリズムにかかわってきた人々の地域の文化，歴史，自然などの資源に対する価値認識の変化とそれに適応したかかわり方の深化，および協会員とそれを取り巻く地域住民との関係の緊密化，さらに行政との一定の距離を保った上での関係の強化など，1970年前後のエコツーリズムの前史から今日までの過程の中でさまざなま課題を克服し続けてきたことが挙げられよう。その継続の要因を時系列的に分析すると以下の7つの段階が挙げられる。

(1)島外の権威者による資源の点的な価値付け

まず1950年代には，政府主導の文化財・史跡・記念物指定のための調査がおこなわれ，西表島の資源が点的ではあるが価値づけられ，島外に示されたことが挙げられる。当時，これらの資源は島民にはさほど認識されていなかったが，国や権威者が指定したことにより，町勢要覧を通じて外向けに紹介される島の唯一の特色として扱われている。

(2)資源の価値化と担保

1972年の本土復帰直後，国は西表を国立公園と指定した。これにより西表島の価値は，点的資源から面的資源へと拡がり，そのスケール性が広く島外の国民に知らされ，観光地としての価値も高められて，今日に引きつがれる観光客を誘引する土台を生み出していった。また一方で国立公園化により一定程度の自然資源が恒久的に担保されることが保証されたことが，後にエコツーリズムを生む条件につながったといえる。

(3)論争を契機とした島民全体での価値資源への再認識

観光地としての資源的価値が高められたものの，それはあくまで研究者や，行政によるものであり，西表島島民の資源に対する認識とは程遠いものであったといえる。島民が，資源の価値について共通の認識を持つきっかけとなったのはライハウゼン書簡をきっかけとした「開発か保護か」「ヤマネコか，人間か」論争である。論争がどのように行われたかは別として，この論争が島民全体に，生活の回りに存在する資源の価値の高さを否応なく知らせた。このことが，西表島全体の価値ある資源の利用について島民共通の課題として考えていく契機となったといえる。

(4)住民参加による広範に亘る資源価値の発見

これが論争のままで終わっていたならば今日までの発展はなかったといえる。だがこの論争を契機に,200 人もの島民の参加・協力により歴史, 文化, 自然, 生活, に関わる資源調査が開始された。このことは島民全体に「人と自然の調和ある発展あり方の模索」を考える機会を提供し, 結果として後の「エコツーリズム」という考えを受け入れやすくする環境素地を形成していったといえる。

(5)情報のストックと共有による島の誇りの育成

さらにエコツーリズムが関係者のみならず島内の関心を高めたのは, 調査結果をそのままで終わらせることなく, 資源の情報を共有する手段として『西表島エコツーリズムガイドブック』という具体的な形に表わされ, 島民を通じて, 島外に出ていっていた知り合いや家族に配布され, 島そのものが在住島民の自慢の対象として価値を高めていったことにある。

(6)センターの設立および活動の組織化による責任の明確化と活動の拡大

以上の 1 から 5 までの過程を経て, 「エコツーリズム協会」を設立するとともに, 外部に対しての受け皿を形成すべく, 「西表野生生物保護センター」を設立し, その中に事務所が設置された。組織化によって責任の明確化および地域住民, 旅行者, 研究者, 旅行業者, 行政など多様な分野との連携が徐々に緊密になり, その結果, 外部との連絡や協力, 連携, 協会員同士の意見交換がなされやすくなった。このことが活動をより活性化していくことにつながると同時に, 全国に多くの情報を発信し, 各地に影響を与えていくことにつながったといえる。

(7)利益の地域還元と, 組織活動から地域活動へ

(6)の段階で終わっていたならば, この活動は単なるエコツーリズム協会組織化運動として終結していたかもしれない。しかし西表島の場合さらなる試練が与えられている。それは, 先に述べたようにエコツーリズムが経済活動の手段であるがゆえに, その事業に携わる者と, そうでない島民との間での経済格差や妬みが発生し, 活動を非難したり, 協力を拒んだりする事態が起こり始めたことである。この事態を協会は謙虚に受け止め, 利益の島への公共的還元を図り, 島民と一体となって島の価値発見作業を進め, 例えば文化祭の発案や, ポストカードの利益還元などを実行し始めている。また積極的に地域自治活動への日常的参加などを進めている。このことはエコツーリズムを単に協会の活動にとどめることなく, 自律的な地域づくり運動へと高めつつあるといえる。

7. 結論

以上，西表島におけるエコツーリズム開発プロセスと，協会を中心とする取り組みについて述べた。

西表島は，資源の保護と持続可能な資源利用の両立策として，エコツーリズムに取り組んできた。その概念を普及するために協会を設立し，現在多くのエコツアー業者を擁するに至っている。エコツーリズムの成功を収益面でとらえるのか，資源の保護によってとらえるのか，人々の心の満足に着目してとらえるのか，地域おこしの活性度で捉えるのかによって人々の成否の判断は異なり，島内でもまとまったコンセンサスができあがっているわけではない。近年，エコツーリズム協会の他にカヌー組合などの組織も活動を行っている。

アプローチが異っていても，「次の世代にいかに美しい文化と歴史と自然の西表島を残すか」という保全と継承の意識が，共通認識として存在し続けることが重要であり，そのことが維持されれば，エコツーリズムは西表島における西表島島民による自律的な観光として位置づいていくと思われる。

注

(1) 第1回調査 1975～1977 年，第2回調査 1982～1984 年，第3回調査 1992～1993 年と，ほぼ10年おきに行われている。

文　献

海津ゆりえ・橋本俊哉・真板昭夫
1997 「エコツーリズムの実践における資源管理システムの研究：西表島をケーススタディとして」『第12回全国大会論文集』pp. 55-64, 日本観光研究学会.

真板昭夫・海津ゆりえ
1996 「エコツーリズムを通じた持続可能な資源利用は可能か？」 6th World Congress on Adventure Travel and Ecotourism, Chile における講演原稿.